

テーマ：

神の法

ザコン ポージイ

Закон Божий

《 罪 について 》

今回のテーマは「罪について」です。

「神の法」は、正教会において罪とは何かということについて次のように教えています。

罪または悪とは、神の法を犯すことである。

従って、罪のことを不法と言うこともある。

これらは全て、神の意志を犯す(神の意志に背く)ことである。

罪は常に、人間を神から引き離し、遠ざけ、苦悩と病と永遠の死(霊の滅亡)に導く。

[人間の世界に罪が現れた次第]

見える世界と人間とを創造するに先立って、神は神使を創造した。神使 ―― それは、身体を持たず、目に見えない不死の神^o である。創造された時点において全ての神使は善なるものであり、神は彼等に完全な自由を与えられた ―― 即ちそれは自分自身が神を愛することを望むか否かという選択の自由である。

最も光明にして強力な神使のうちの一人が、神を愛することを望まず、自分が神にとって代わることを望むようになった。彼は神に敵対し、他の神使をもそそのかした。これらの神使たちは本来の光と至福(=喜び)を失い、悪の霊となった。これらを悪魔、魔鬼と呼ぶ。彼等の頭がサタナである。神の敵という意味である。

悪魔らは、人間に神の言うことを聞かないように ―― 即ち罪を犯すことを教えた。ずる賢い誘いによって、神が創造した最初の人間たち(=アダムとエワ)を罪に陥れた。その後の人間は皆、罪を犯したアダムとエワの子孫である。全ての人間の中に罪の痕跡が入り、程度の差こそあれ罪から自由な者は誰一人としていない。神の意志に反することをを行った人間は、楽園の至福を失い、死と病、苦悩を知る者となった。このように全ての人間は、今日に至るまで罪を犯すことによって、本来人間に与えられていたはずの光と至福を失い、自分の霊を暗ますというプロセスを繰り返している。

しかし、楽園を失った人間に対する神の憐れみによって、私たちは人類の救世主を賜った。彼は、一度絶たれた神と人間との間の調和を復活させるものであり、人間が再び神の国に戻ることを可能にしてくれた。この救世主、神の子がイイスス・ハリストスである。